

Title	セックスワーカーにおけるピル使用、コンドーム使用、および性感染症歴の関連
Author(s)	木本, 絹子
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43686
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	木本絹子
博士の専攻分野の名称	博士(医学)
学位記番号	第16509号
学位授与年月日	平成13年9月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 医学系研究科社会医学専攻
学位論文名	セックスワーカーにおけるピル使用、コンドーム使用、および性感染症歴の関連
論文審査委員	(主査) 教授 多田羅浩三 (副査) 教授 山西 弘一 教授 杉本 央

論文内容の要旨

【目的】

我国においては経口避妊薬（ピル）の認可に際し、ピル使用によりコンドーム使用が減少し、結果的にエイズを含む性感染症の流行につながるものが強く危惧されていた。本研究は、性感染症に感染する機会の最も多いと思われるセックスワーカーたちが、ピル認可以前から中用量ないしは高用量ピルを避妊目的に転用していたことに着目して、コンドーム使用を前提としたセックスワーカーにおける、ピルの使用によるコンドーム使用に対する影響、およびクラミジア感染歴との関連を明らかにすることを目的とした。

【方法】

大阪市内S診療所の性病検診あるいは性病科外来を、1998年4月から1999年3月の1年間に受診したすべてのセックスワーカー472名に対し自己記入方式による人口社会学的属性、性行動、避妊・妊娠歴、性感染症歴に関するアンケートを実施し、コンドーム使用を前提とした仕事に就いている者92名を抽出し本研究の分析対象とした。

【成績】

ピル使用の有無別にクラミジア感染歴を有する者の割合をみると、1日の平均収入が「5万円未満」と答えた者を除く全ての項目の者において、ピル『使用』の者がピル『非使用』の者より高率であった。このうち「中学卒」、風俗歴が「1年以上」、1日の平均収入が「5万円以上」と答えた者においては有意差が認められた。ピル使用の有無別にコンドーム使用方法をみると、コンドームを『常時かつ適切』に使用している者の割合は、ピル『非使用』の者がピル『使用』の者より有意に高率であった。コンドームの『不完全』な使用に対するロジスティック回帰分析において、ピルの『非使用』に対する『使用』のオッズ比は4.43（95%信頼区間1.12-17.60）であった。また、クラミジア感染歴に対するコンドーム『常時かつ適切』使用の、『間歇的』使用ないしは『非』使用に対するオッズ比は0.08（95%信頼区間0.01-0.68）であり、『常時だが不適切』な使用に対するオッズ比は0.92（95%信頼区間0.35-2.39）であった。

【結論】

ピル『使用』の者は、クラミジア感染歴を有する者の割合が、ピル『非使用』の者より有意に高率であった。ピル『使用』の者は、コンドーム使用において『不完全』な使用の者の割合がピル『非使用』の者に比べ有意に高率であった。このことは、ピル『使用』の者におけるコンドームの『不完全』な使用が性感染症の罹患と一定の関連を有して

いることを示唆している。また、コンドームによってクラミジア感染症を予防するためには、『常時かつ適切』に使用する必要があり、『常時』使用していても、使用方法が『不適切』な場合は、予防効果に乏しいことが本研究により明らかにされた。将来、我国においてもピルを避妊法として選択する女性が徐々に増大していくことが予想されるが、その際、HIVを含む性感染症を予防するためにはコンドームを『常時かつ適切』に使用することを同時に徹底して教育していく必要がある。

論文審査の結果の要旨

本研究は、性感染症に感染する機会が多いと思われるセックスワーカーを対象にして、ピルの使用とクラミジア感染歴、およびコンドーム使用との関連を明らかにすることを目的としたものである。

大阪市内S診療所の性病検診あるいは性病科外来を、1998年4月から1999年3月の1年間に受診したすべてのセックスワーカー472名に対し、人口社会学的属性、性行動、避妊・妊娠歴、性感染症歴に関するアンケートを実施し、コンドーム使用を前提とした仕事に就いている者92名を抽出し、本研究の分析対象とした。

ピル使用の有無別にクラミジア感染歴を有する者の割合をみると、ほぼ全ての項目の者において、ピル『使用』の者がピル『非使用』の者より高率であった。ピル使用の有無別にコンドーム使用方法をみると、コンドームを『常時かつ適切』に使用している者の割合は、ピル『非使用』の者がピル『使用』の者より有意に高率であった。ロジスティック回帰分析において、コンドームの『不完全』な使用に対するピル『使用』の『非使用』に対するオッズ比は4.43 (95%信頼区間1.12-17.60) であった。また、クラミジア感染歴に対するコンドーム『常時かつ適切』使用の、『間歇的』使用ないしは『非』使用に対するオッズ比は0.08 (95%信頼区間0.01-0.68) であった。これらの結果は、ピル『使用』がコンドームの『不完全』な使用と一定の関連を有しており、そのことが性感染症の罹患を結果していることを示唆している。

本研究は、ピルの使用がコンドームの不完全な使用につながり、性感染症の罹患を結果することを示したものであり、わが国の今後の性感染症予防対策の推進に対し、非常に重要な知見を明らかにした点で、学位に値すると考える。